建築雑誌に示された日本の建築界への「空間」という概念の
導入と定着THE INTRODUCTION AND DEVELOPMENT OF THE CONCEPT OF "SPACE"
AMONG JAPANESE ARCHITECTS SHOWN IN THE FOUR MAJOR
ARCHITECTURAL MAGAZINES BETWEEN 1887 AND 1960

藤岡 洋保*, 佐藤 由美**

Hiroyasu FUJIOKA and Yumi SATO

This paper shows how the concept of "space", which was first developed in Germany in the late 19th century, was introduced into and developed in Japan, analyzing the articles on the four major Japanese architectural magazines between 1887 and 1960. Until the 1920s, the word *kukan* (space) had rarely been used in them. The concept of "space" began to be developed in the 1930s. From the 1950s on, it has been utilized by Japanese architects, especially the team led by Kenzo Tange. Their move implies that at that time modern rationalism began to gain ground in many Japanese architects' thoughts.

Keywords: *space, Japanese modern architecture, modern rationalism*

空間; 日本近代建築, 近代合理主義

1. 緒 言

今日の日本の建築界では、「空間」は建築を語る上で必須の概念といっている。建築意匠に関する文献に「空間」という語は頻繁に登場するし、研究者だけではなく、建築家もこの語を常用している。

しかし、建築においては、この「空間」という概念はヨーロッパにおいても日本においても古くから親しまれていたわけではない。

コルネリス・ファン・デ・フェンの『建築の空間』（佐々木宏訳、丸善、1981年）によれば、「古代以来、空間理念は一般に哲学や自然科学の重要な論議の問題とされていた。しかも全く奇妙なことに建築理論の中ではごく最近になって現われてきた。実際のところ19世紀後半以前には、ひとつとしてそれについての建築理論は見当たらない」（p. v）。すなわち、「空間」は哲学や自然科学の分野では古代から重要な関心事だったが、それが建築を分析する際の主要な概念として認識されるようになったのは、すなわち、ファン・デ・フェンにしたがえば、「空間理念が建築の基本であるという考え方が導入された」（p. viii）のは、19世紀の後半だったのである。

ファン・デ・フェンは、このような考え方を最初に公式に表明したのはアドルフ・フォン・ヒルデブラントやウグスト・シュマルゾウで、彼らはともに1893年にそれを著書で示した（p. x），と述べている。

上松佑二は『建築空間論 その美学的考察』（早稲田大学出版会、1986年）で、「『空間』の理念が『建築の生命』として意識的に登場するためには、やはり、ヤーコプ・ブルクハルトを待たなければならなかった」（p. 18）と、1855年のブルクハルトの著作『チチェローネ』にその嚆矢を見ている。と同時に上松も、「ヴェルフリンをはじめ十九世紀末から今世紀初頭の芸術学者に決定的な影響を与えたのは、アドルフ・フォン・ヒルデブラントの『造形芸術における形式の問題』（一八九三）である。自らの彫刻家としての体験が、造形芸術における空間とフォルムの問題に創作美学からの的確な表現を与えている」（p. 22）と、ファン・デ・フェン同様、「空間」が建築を語る際の主要な概念として注目されはじめたのは19世紀末のドイツ語圏においてであったことを指摘している。

この概念は日本の建築界にも導入され、やがて建築を

* 東京工業大学工学部一般教育等図学 助教授・工博

Assoc. Prof., Sec. of Descriptive Geometry, Faculty of Eng., Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

** 建設省東北地方建設局・工修

Ministry of Construction, Tohoku Regional Construction Bureau, M. Eng.

語る際に活用されることになる。「空間」という概念で建築を語ることは、「室」や「建物」、「庭園」などの語を用いる思考法よりも、抽象的なレベルで建築や環境を見る行為といえる。つまり可視的なもの（表層）ではなく、その背後にあると考えられる「空間」という抽象的なものに建築の本質を見るということである。そこには建築の成り立ちに対する関心があり、この概念を展開することによって「空間の分節」とか、「空間の連結」、「内部空間」、「外部空間」といったような、表層を超えた普遍的なレベルでの考察が可能になる。

抽象的・普遍的なものを本質と見るこのような思考法は近代（主義）建築の基盤である近代合理主義の特徴の一つである。近代合理主義は表層よりもその背後に潜むと考えられる普遍的要素を重視する。通常、建築においては「空間」という概念は茫漠とした単なる三次元的な拡がりやをさすのではなく、何らかの知的操作によって分節され価値を付与された三次元的なまとまり、として認識されているとあってよからう。つまり、「空間」は人間の理性によって認知され得るものであり、「空間」に建築の基本原則を見るという行為は建築を成り立たせると考えられる普遍的要素に対する高い関心、いいかえれば合理主義的思考に支えられている。この概念が19世紀後半に建築を語るのに導入され、やがて頻用されるようになったことは近代合理主義の興隆、そしてそれを基盤にした近代（主義）建築の台頭と無関係ではない。したがって、この「空間」という概念が日本の建築界に導入され定着していく過程を歴史的に追うことは近代合理主義的思考、すなわち、近代（主義）建築の思想的基盤、が日本にどのように導入され定着していったのかをあとづける試みの一つとして位置づけることができると考えられる。

本研究は、以上のような認識のもとに、「空間」という概念が日本の建築界でどのように展開されたのかについて分析しつつ、そこに見られる特徴について考察したものである。すなわち、「空間」という概念そのものを問題にするのではなく、「空間」という概念が導入され活用されていく過程に注目するのである。その目的は、「空間」を近代合理主義のキー・ワードの一つと見て、その導入・活用の過程を通して日本の建築界における近代合理主義的思考の導入・理解のされ方の一端をさぐるところにある。

その対象になり得る史料の数は膨大である。これまでに日本語で書かれたすべての建築文献が該当し得る。理想的にはそのすべてを収集・分析すべきだが、実際にはかなりむずかしいので、本研究では、通時的に見ることを意図して、比較的長期にわたって発行された建築雑誌4誌を主な分析対象にした。具体的には、『建築雑誌』・『建築世界』・『国際建築』（1927年5月号までは『国際

建築時論』）・『新建築』¹⁾を通覧した。『建築工芸アイシーオール』など、分析の過程で必要と思われたものにも適宜目を通した。当時の辞典や辞書なども参考にしている。

研究の範囲は1887（明治20）年から1960（昭和35）年までとした。1887年からとしたのは分析対象にした建築雑誌のうち最も古い『建築雑誌』の創刊にあわせてためである。また、1960年までとしたのは、予備的な調査で「空間」という語が日本の建築文献によく用いられるようになるのが戦後であることがかなり予想できたこと、そして活用されるようになった経緯や背景を分析・考察するのに1960年までをとれば十分な資料が得られると考えたからである。

研究の方法としては、まず「空間」という語に注目した。「空間」という概念を適用する場合には当然ながらこの語を使用することになるからである。ちなみに、「空隙」とか「スペース」のような当時の文献に登場する類似の語にも注意をはらった。そして、「空間」やそれに類似する語が登場する文献を悉皆的に収集し、そこでの用いられ方を分析した。

本研究では主な資料を4種の建築雑誌に限っているの、そこから日本の建築界における「空間」の扱い方について普遍적인見解が得られるわけではない。しかし、そのような限定つきではあるが、このテーマについての研究の端緒を開こうとする試みという点での意義はあると筆者らは考えている。

ちなみに、英語の space、ドイツ語の raum に対応する語としての「空間」が明治中期に存在していたことは確かである。たとえば、1881（明治14）年発行の『哲学辞彙』（井上哲次郎、東京大学三学部印行）は英語の哲学用語に対応する日本語の翻訳を掲載したものだが、そこに「space 空間」（p.86）と記されている。また、1886（明治19）年発行の『独英和 三対字彙大全』（高良二・寺田勇吉共訳、共同館）には「Raum, m. (-es; pl Raume) room, space, place, hold of a ship, 場所, 空所, 空間, 明キ, 余地, 室, 艙ニベヤ（以下略）」（p.1019）とある。

2. 1940年頃までの「空間」という語を用いた記述

分析対象に選んだ建築雑誌の中でもっとも早くから発行されているのは建築学会の機関誌『建築雑誌』である。『建築雑誌』に「空間」という語が使われた例はかなり早くから見いだすことができる。その初出は1890（明治23）年3月号の「室内採温法」で、「背後モ鉄板ヲ用ヒテイナル三吋巾ノ空間ヲ置キカクテ背後ト両妻ノ後及ヒ灰止下ノ空間ハ相通シ（中略）又冷氣ハハヨリ入りテイナル空間ニ入り」（p.35）という記述の中に見られる。

しかし、戦前の、それも特に明治・大正時代の『建築雑誌』においては「空間」という語は稀にしか登場しな

い。1927 (昭和2) 年までは「空間」やそれに類似する語を用いた記事の数は年間で最大でも4例 (1917年) にすぎず、まったく見られない巻もある。

1907 (明治40) 年創刊の『建築世界』においても同様で、1909 (明治42) 年にはじめて「空間」という語を用いた記事²⁾が登場し (この年には他に2件ある)、その後1914 (大正3) 年までは全体で1件しかなく、1915 (大正4) 年から1926 (大正15) 年までは「空間」という語を用いた記事は各年に2件から10件だけである。

しかも、この時代の『建築雑誌』・『建築世界』における「空間」という語はまず例外なく一つの記事の中に1か所または数か所唐突に登場するだけで、しかもそのほとんどは、「畢竟上図組物備への間に生ずる異様な空間を充填するの意味を有するものなるを以てCなる空間は其大体に就て組物と臺股との輪郭を画せるABなる並行線を以て之を限れると見るべく」³⁾とか、「第二に空き間 (Spaces) と繰り形に応じて、模様の当てハメ方が当を得たること」⁴⁾のように、「物と物との間」や「すきま」、「あるまとまりをもった広がり」を指示するために用いられているにすぎず、建築を語る上での主要な概念として扱われていると考えられる例を見いだすことはできない。

ちなみに、上記以外の「空間」の使用例として、数は少ないが、欧米の建築文献の翻訳や“space”・“raum”の訳語として登場するものがある。それは2つの分野、すなわち建築構造学とドイツ美学・美術史関係のものに見られる。前者の例としては下記のようなものを上げることができる。

- ・「若し一系内にある全構材及各分格点に働く外力共に同一平面内にある場合は是を名けて平面架構 (Framed Structure in plane) と云ひ然らざる場合には是を名けて空間架構 (Framed Structure in space) と云ふ」
日比忠彦「鉄骨構造建築学 (+)」(『建築雑誌』1907年3月号, p. 7)
- ・「檜柱は地階に達する迄全くコンクリート中に埋め、その間の空間はコンクリート床を張る」
内藤多仲「事務館に於ける耐震構造の一例 エン지니어リングレコード所載 (一九一一年八月五日)」(『建築雑誌』1911年9月号, p. 33)

また、後者の例としては『建築世界』1919年7月号から翌20年1月号にかけて連載された「独逸建築略史」(アーデルバート・マッタイ原著、鈴木久蔵訳) などがあげられる。その中では「空間感情」とか「空間観念」のような、ドイツ美学・美術史に特徴的な表現が見られる⁵⁾。翻訳文の中ではないが、ドイツ美学・美術史の流儀に由来すると思われる「空間」の使用法も散見される。それは、たとえば、下記のようなものである。

- ・「建築は美術の一種類である。而して美術を空間芸術と時

間芸術とに分けると前者に属し、又造形美術の内にも入り、彫刻、絵画と列を同じうしてゐるものである。」

黒田明信「建築批評の標準」(『建築雑誌』1911年5月号, p. 3)

- ・「若し建築を空間を仕切る芸術であるとするならば其内に人を住ましむるは不合理である。」

野田俊彦「建築非芸術論」(『建築雑誌』1915年10月号, p. 28)

上記の引用のような例は建築美について語るときや他の芸術、たとえば彫刻などに言及するときに見られる。山崎静太郎が『建築雑誌』1914年11月号に書いた「建築美私論 (二)」の「建築と彫刻」(p. 5)の項だけに5回「空間」という語が登場するのはそのような傾向を象徴するものといえる。

以上から、明治・大正時代の日本の建築雑誌においては「空間」という語は稀にしか見られないこと、その多くは「物と物との間」、「すきま」、「あるまとまりをもった広がり」という意味に用いられていること、それ以外には欧米の建築文献の翻訳の中に登場すること、それに関連してドイツ美学・美術史の流儀に由来すると思われるやり方で「空間」を使う例があったことがわかる。このことは「空間」という語が欧米、特にドイツ起源のものとして日本の建築界に導入されつつあったことを示している。しかし、明治・大正時代の『建築雑誌』や『建築世界』にこの「空間」を建築を語る際の主要概念に高めた例を見いだすことはできない。後藤慶二が『建築雑誌』1916 (大正5) 年7月号に記した以下の文章はそのような当時の状況を象徴するものといえる。

「構造上の問題は即ち科学 (狭義の) 問題で意匠の問題は芸術の問題である、尚之を敷衍すれば前者は空間的問題で後者は非空間的問題である、」(p. 36)

後藤慶二「形而下の構造に対する形而上の批判」

ここでは、構造の問題は「空間」の問題だが、意匠の問題はそうではないと述べられている。

明治・大正時代に比べ、昭和に入ると「空間」という語の登場頻度は多少高くなる。たとえば、『建築雑誌』では1928 (昭和3) 年から1944 (昭和19) 年の間で「空間」という語が登場する記事の数は年ごとで2件から22件であるが、その17年のうちの9年においては1年間に10以上の記事に掲載されている。

1925 (大正14) 年創刊の『国際建築』と『新建築』はいずれも建築の意匠に関する記事を多く載せているので、昭和初期における「空間」という語の用いられ方を検討するのに適した資料といえる。

『国際建築』において「空間」、または「スペース」などそれに類する語を用いた記事を収集すると、創刊直後の4年間 (1928年まで) はそれぞれ8件、3件、2件、2件と少ない。しかし、1929 (昭和4) 年に18件登場してから後は毎年11件から27件の記事に使われているの

を見ることができる。件数は『建築雑誌』より多いが、一つの記事の中に1か所または数か所断片的に登場するだけで、「空間」を叙述の中心にすえるようなものが少ない点では同様である。先に指摘した明治・大正時代の「空間」という語の使用法と同様、「物と物との間」とか「すきま」、「あるまとまりをもったひろがり」の意味で使われている例が多い。

それとともに、『国際建築』においては欧米文献の翻訳や紹介に、また欧米の建築家やその作品に関する記事に「空間」という語が登場することが多いのが特徴である。たとえば、1929（昭和4）年の同誌における「空間」という語が用いられた記事18件のうち、6件は下記のような欧米文献の翻訳である。

- 「直角は全く正確に空間を決定するに用ひられるが故に」ル・コルビュジェ／池田英夫訳「ユルバニスム（三）」（『国際建築』1929年3月号，p.30）
- 「そしてその調和のうちに、確実性ある、調和的な凡ての比例均衡と、空間、時間、材料それ自力の自然性を通して置かれた必要とを均整にした、家屋と云ふものが社会の余剰的存在から分離された。その上に内部的空間と外部的空間とを一致調和させた。絵画が建築的構成から区分された理由はそれに外ならない。色彩は空間の変化の如くに、厳格に使用されはしない。」ジャン・パドウィシ／岩崎奇作訳「構成主義者」（『国際建築』1929年7月号，p.9）

また、それ以外の5件は、下記の引用のように、ヨーロッパの建築家に言及したものである。

- 「ファザードから家（ハウス）から空間の構成へ（ベーネ）の変転と」川喜田煉七郎「ペーレンスの事業及び作品譜にそへて」（『国際建築』1929年10月号，p.6）
- 「メ氏の説明にある『運動する光の看板の打上げ火花。浮びまた潜り、飛出しまた消える』乱雑な光の空間がよく表はれていると思ふ。」蔵田周忠「国際雑記（一〇）」（『国際建築』1929年10月号，p.14）

ここに示したような傾向、すなわち欧米の建築文献の翻訳や欧米の建築家やその作品に関連して「空間」という語が登場するという傾向は『国際建築』に一貫して見られる。そのような傾向を代表するのは蔵田周忠である。彼は同誌の「国際雑記」欄などでこの語を用いている。

同様の傾向は『新建築』にも見ることができる。

『新建築』においても「空間」という語は断片的に登場する。そのほとんどは「特に坊ちゃん嬢ちゃんの寝室は、寝台車式になってゐて、空間を非常に有効に使用してあります」⁶⁾のような「あるまとまりをもった広がり」や「すきま」を意味するか、欧米の建築文献に直接・間接に関係があるものである。『新建築』においても欧米文献の翻訳や欧米の建築家への言及の中で「空間」が用いられることが多い。戦前の『新建築』で「空間」やそ

れに類する語を含む記事が最も多く登場する年は1940年で、20件あるが、その中の15件がそれに該当する。

以上、『国際建築』・『新建築』を中心に昭和初期における「空間」という語の使われ方について見たが、ここでも明治・大正時代に関して指摘したのと同様の傾向を見てとることができる。すなわち、「空間」という語は「物と物との間」、「すきま」、「あるまとまりをもった広がり」という意味で、また欧米の建築文献の翻訳の中や欧米建築家に言及した文章に用いられている。このことも「空間」が外来のもので、欧米の建築家や建築を語ることを通して、またドイツ美学・美術史の影響を受けながら、しだいに日本の建築文献に浸透していったことを示唆していると考えられる⁷⁾。

3. 「空間」を主要概念にした建築分析法の導入と展開

前章で、昭和初期においても「空間」という語を用いた記述は少ないこと、そのほとんどは「空間」を「物と物との間」、「すきま」、「あるまとまりを持った広がり」という意味で用いただけのものか、欧米の建築文献の翻訳や欧米建築家への言及の中に見られることを指摘したが、昭和初期には「空間」を主要な概念にして建築を語ろうとする先駆的な試みが見られることにも注意する必要がある。

調査対象雑誌の中で筆者らが調べ得た限りでは、その最初の例は『新建築』1927年1月号掲載の元良 勲の「建築は空間の堆積である」（pp.54-60）と考えられる。この文中には「空間」という語が頻繁に登場し、「屋根や、柱や、壁や、床が、決して建築そのものではなく、之等の造り出す空間そのものゝ集合、堆積したものが建築の本体である事を論じて見よう」（p.54）としている。ここでは「空間」こそが実体であることが主張されている。

同じ『新建築』の1932年6月号掲載の山田 守の「住宅の一実例 其三」（pp.201-208）では「住居空間の自然性回復」とか、「住居空間の区別 住居空間を分ちて三とする。1自然的住居空間 2半自然的空間 3人工的空間」（p.202）のように、住宅とその周囲の環境を「空間」という概念を導入して3つに区分している。

また、川喜田煉七郎は『国際建築』1930年2月号掲載の「第二回国際新建築会議詳報」の中で、「最も合目的に徹底した住居空間の最小限度」（p.9）のように、「住居空間」という語を用いている。川喜田はこの頃住宅の機能に言及するとき、「空間」という語をしばしば使っている。それが最も顕著に見られるのは彼を中心につくられた『建築工芸アイシーオール』の誌上である。1931（昭和6）年11月刊行の同誌第1巻第1号の「近代住宅の構成 no.1」（pp.1-24）は「十月九日早大建築科主催の新興建築講演会に於る同人川喜田の講演草稿に輔正を加へたもの」（p.1）だが、そこではアレキサンダー・

クラインの平面分析法に言及しつつ、「住居空間」(p.2)とか、「多種多様の空間の連続」(p.8),「我々の視空間ならざる触空間の感覚がすべてをよい建築であると感ずるだろうか」(p.11),「そこで同じ様な共通共同の空間(視空間・触空間の一切をふくんだ空間)に生活するといふ心理的な理由で、この数の少ない相似・類似の空間を我々がもつ事が重要になる」(p.11),「同じ様な必要空間の緊密な連続でもって住居を形成すべきである」(p.11)のように、ひんばんに「空間」という語が登場する。ここでは「空間」は単なる「すきま」や「あるまとまりを持った広がり」という以上に、住宅について考察する際の重要な概念としても用いられている。この他にも川喜田は『建築工芸アイシーオール』1935年5月号の「一住宅—実験住宅」で「その特殊な用途を持った空間が如何に住宅内で連絡してゐるか、そしてその大きな空間同志が又どう連絡してゐるかといふ問題を、特別に取出してみようと思ふ」(p.12)と、「用途空間」という概念を導入している。ここにはある機能とそれに対応する「空間」を軸に住宅をとらえようという姿勢が見られる。この「空間」は必ずしも「室」である必要はなく、廊下なども含むものとしてとらえられている。

同様の発想で住宅の機能を分析するのに「空間」という概念を導入した研究者として注目されるのが西山卯三である。西山は有名な食寝分離論を展開する基礎になった研究⁸⁾で、「就寝空間」、「採食空間」という表現を用いている。ここでは「寝室」とか「食事室」という呼称が避けられている。これは就寝や食事という行為が実際に行われる場を的確に表したいという要求にもとづくものと考えられる。「寝室」や「食事室」のような語ではそこで実際に展開される行為を十分には指示できないが、「空間」という概念を導入することで、ある行為に対応する場を指示することが可能になったのである。

以上に示したように、行為(機能)とそれが行われる場との対応を指示するために「空間」という概念が川喜田や西山によって導入・展開された。ここでは「空間」は建築を語るときの一つの主要な概念になり得ているように思われるが、特に川喜田の場合、それが十分に咀嚼されていたかについては疑問が残る。というのは、『建築工芸アイシーオール』に掲載された川喜田の文章に「空間」という語があらわれるのが住宅関係のものにほぼ限定されているからである。川喜田は商店建築など他の建築種について同誌に文章を掲載しているが、そこでは、住宅と同様に機能にも関心が向けられながらも、「空間」という語はほとんど登場しない。つまり、川喜田が「空間」という概念を展開するのは住宅の、それも機能にかかわるものに限定されているのである。このことは川喜田にとって「空間」は(おそらくアレキサンダー・クラインらから⁹⁾与えられた概念のレベルにとどまってお

り、彼自身の思想として血肉化されてはいないことを示唆するものと考えられる。

「空間」が「借り物」のレベルにとどまっているという傾向はこの時期にこの語を用いた山田 守や蔵田周忠にも指摘できると考えられる。蔵田の文章においては「空間」は欧米の近代建築に言及するときにほぼ限られており、彼が読んでいたであろう欧米の建築雑誌の影響を感じさせる。また、山田の場合には「空間」という語は定期的に見られるのではなく、いくつかの文章に唐突に登場する。いずれの場合も「空間」を建築を語る際の主要な概念にすえるというよりは、欧米の建築文献に影響されてこの語を用いているという印象が強い。

先述のように、分析対象にした建築雑誌では「空間」という概念は住宅の分析に最初に導入されたと考えられるが、1940年代には日本の伝統的建築を語る際に使われた例も見いだすことができる。それを行ったのは井上充夫と浜口隆一である。

井上は『建築雑誌』1943年4月号に掲載された「我国上代建築の配置及び平面に見る空間把握の方式に就いて」の「論文梗概」(pp.332-333)で、日本の上代の建築の平面や配置の形式に「平行座標式空間把握方式」と「極座標式空間把握方式」があり、「我国上代建築に於ける空間把握の方式は常に一貫して縦軸式より横軸式へ、極座標式より平行座標式へと転化した事」(p.333)を主張している。

また、浜口は『新建築』1944年の1月号、4月号、7月8月合併号、10月号に連載した「日本国民建築様式の問題」で、「建築とは行為的=空間的要素と構築的=物体的要素との何らかの統一」であり、「西洋の建築意欲は伝統的に構築的=物体的要素に傾倒してゆき、日本の建築意欲は伝統的に行為的=空間的要素に傾倒していった」こと、そして「日本国民建築様式の問題は、われわれの作る建築の行為的=空間的要素の形成の仕方とその主たる場所を見出さなければならない」ことを主張している¹⁰⁾。

ここで注目すべきは、2人の理論の妥当性ではなく、「空間」という概念を持ちこむことによって日本の伝統的な建築に新しい認識をもたらそうという意識である。ここでも「空間」が建築を語る上での一つの主要な概念として展開されているのを見ることができる。

4. 1950年代の丹下健三を中心とするグループによる「空間」を活用した建築論の展開

『新建築』を見ると、1950年頃から「空間」や「スペース」という語を用いた記事が多くなるのがわかる。

「空間」という語が用いられた記事の数がその年の『新建築』の総記事数に占める割合を見ると、1948(昭和23)年が10%, 1949年が20%, 1950年が33%, 1951年

が40%と増加し、それ以後は1955（昭和30）年まで毎年40%以上になっている。

『建築雑誌』でも似たような傾向が見られる。『建築雑誌』において「空間」、またはそれに類する語を用いた記事の数は1946（昭和21）年が4件、1947年が3件、1948年が7件、1949年が11件、1950年が23件、1951年が34件、1952年が35件、1953年が24件、1954年と1955年がともに31件となっている。

これらの雑誌において1950（昭和25）年頃から「空間」及びそれに類する語が増えるのは、記事の内容や編集方針の変更などの他の要因があるためではないか、という反論があり得るだろう。また、戦前においても『新建築』や『建築雑誌』では「空間」という語を用いた記事が20件程度あった年があるのだから、1950年からの記事数は「増加」というほどのものではないのではないかと、という指摘があるかもしれない。しかし、1950年以降においては記事の数が増えたというだけでなく、一つの記事の中で「空間」あるいはそれに類する語は頻繁に登場し、1冊の雑誌に掲載された「空間」という語を悉皆的に拾い出すのに困難を感じるほどなのである。単に記事の数だけでなく、登場する頻度が多くなったということである。1950年以後は「空間」やそれに類する「スペース」は日本の建築家の日常用語になった感がある。

その中には戦前と同様、欧米の建築文献の翻訳として登場する例も多い（特に『新建築』）。戦前においてはヨーロッパ、それもドイツ語圏のものが多かったと考えられるのに対して、戦後の場合は“Progressive Architecture”や“Architectural Record”など、アメリカの建築雑誌の記事を翻訳したものが多い¹¹⁾。

もちろん、「空間」という語が日常的に使用されるようになったからといって、「空間」という概念で建築を語るやり方が一般化したとはいえない。一般的には「空間」という語が、「気持ちのよい空間」¹²⁾とか、「伸びやかな空間」¹³⁾、「大きな空間」¹⁴⁾、「四角い空間」¹⁵⁾のように、ある場の雰囲気や形状などを描写するのに用いられたにすぎない例も多い。このような表現法は昭和戦前にも散見されたものである。

しかし、その一方で、戦後には「空間」という概念を用いて建築を語るというやり方は着実に浸透していったと考えられる。1940年頃に西山卯三によってはじめられたと考えられる「行為」とそれが行われる「場」との対応を示すために「空間」という概念を適用するというやり方は戦後になると他の建築家・研究者の論文や記述にも見いだせるようになる。たとえば、池辺 陽や清家清などの建築計画関係の論文には「純粹動線空間」¹⁶⁾、「家事労働の空間」¹⁷⁾、「家族の空間」¹⁸⁾などのような表現を見ることができる。また、以下に示すような記述からは、「空間」という抽象的な概念を導入することによって機

能を軸に住宅の構成を新しい観点から見ることも可能になったことがうかがわれる。

「生活機能が住機能として、住宅の内部にとり入れられるためにはその機能の利用度が大であることが必要である。又利用度の大きいものから順次、住空間に占有空間を獲得し、住空間は分化してゆく。」

清家清「住宅2. 平面について」（『新建築』1952年2月号、p.206）

しかし、1950年代の『新建築』を見る限り、「空間」という語を最も多用しただけではなく「空間」という概念を最も巧みに活用したのは丹下健三と彼を中心とするグループ（丹下研究室）¹⁹⁾であった、と考えられる。

彼らは「空間」を建築を把握したりそのあり方を考察するときの主要概念として用いた。当時の建築を批判的に乗りこえることをめざすときにも、日本の建築的伝統を語る際にも、あるいは都市と建築の関係を説明する際にもこの概念を用いた。彼らにとって「空間という立場で考え」²⁰⁾ことは建築を語るときの基本的な枠組であったと考えられ、それで建築を、あるいは都市をも、統一的に理解しようとしていた。

たとえば、彼らは当時の建築界の状況を批判的に分析しつつ彼らのめざす建築の正当性を主張するのに「空間」を使っている。1955（昭和30）年頃の彼らの発言を見ると、「機能」と「表現」に対する「功利的な合理主義の立場」と「それに続く機能主義の立場」、そして「いわゆる社会主義リアリズムの陣営」を「一面性の抽象」または「二面性の野合」として批判している²¹⁾。とりわけ当時影響力があったと思われる機能主義に対して彼らは次のような批判を加えている。

「現在われわれの考えている空間ともっとも激しい対立関係にあるものは機能主義であると思われる。いわゆる機能主義建築の方法というものが個々の建築の要求する機能を個別的に分析し、これにもとづいて空間のあり方を制限し、規定し、その限りで個別的要素の集積としての全体を合理的に構成してゆこうとする、いわば限定的な方法であったとわれわれは解するのであるが、これがわれわれの方法と対立するというのはいかなる意味なのか」

沖 種郎ほか「コア・システム—空間の無限定性」（『新建築』1955年1月号、p.57）

ここに引用した論文の中で、彼らは前川建築事務所の国会図書館計画案（1954年）を例に、そこには「ブロック構成においても平面においても、建築一般よりも図書館・図書館一般よりも国会図書館というぎりぎりの限定性に立脚した特殊解であり、空間一般についての追求が全くない」（p.57）と批判している。そして「建築においては必ずある限定的な要素—シャフト・構造等—が出てくるわけだが、此等の限定的な要素を本来無限定であるべき1次空間から排除しようという要求がコア・システムを生んだといえる」（p.57）と、コア・システム

の優位を主張している。丹下はこのような「空間における限定と無限定」^[22]の関係を建築について考察する上での重要な問題として以下のように記している。

「生活を伝統と進歩との、私的なものと社会的なものとの交錯した抵抗的な発展として、動的に見る立場からすれば、空間における限定性と無限定性、同時性と永遠性の問題に目を向けなければならないであろう。」

丹下健三「現在日本において近代建築をいかに理解するか」(『新建築』1955年1月号, p.16)

さらに丹下らは自らの創作の手がかりとして「空間の典型化」という考えを提唱した。彼らは「その時々条件を分析しながら、そこからもっとも有望な要素を抽出しそれが実現できるよう努力する必要がある」^[23]ことを主張し、設計に対する両極のアプローチ、すなわち機能主義者流の《はじめに機能がある》とミースのユニヴァーサル・スペースのような《はじめに空間がある》という設計に対する両極のアプローチ、は実際には「おそらく繰返し繰返し相互のアプローチがつまみあげられて、遂に分かち難く結び合った時に、すなわち典型的な空間に到達する」とする。たとえば、「オフィスの執務空間はその範囲内では極度のフレキシビリティを要求している」ように、「個々の機能分化を明確化して、あらかじめいくつかに類型化しておくことが個々の機能の典型化を促進することになり、「空間の典型化」とはそれに対応するものだったのである^[24]。その背景には丹下健三の「建築家が機能の本質をつかむということは、無媒介には不可能であって、空間を媒介として、はじめてつかみとることができるものだ」^[25]という考え方があったと見られる。

以上のように、当時の建築の状況を批判的に乗り越えつつ自らの考えを展開するに際して、丹下健三を中心とするグループは「空間」という概念を活用しているのである。

また、丹下らはこの頃「社会的空間」、「私的空間」という語も用いている。丹下は上掲の論文「現在日本において近代建築をいかに理解するか」(『新建築』1955年1月号)の中でそれが意味するものについて簡単な説明を加えている。それによれば、「わたくし達の現実の生活の中には、また私的＝経済的立場と、社会的立場とが抵抗しつつ交錯して」おり、これを「建築的に即して考えてゆくと、内部機能と外部機能とでも呼びたいものを認めないわけにはゆかない。(中略)そうして、内部機能のなかに私的なもの、あるいは私的経済的な立場からする機能を考え、外部機能を社会的立場からするものと考えて、(中略)私的空間と社会的空間とか、私的尺度と社会的尺度とかいうことばを使ってきた」ということである (p.16)。

丹下らは創作に際してこの「社会的空間」をも認識す

べきことを主張している。彼らは「個々の建築のもつ内部機能をより高度に発達せしめ、かつそのおのおのは地上にもつ社会的空間の連続によって、その建築の社会に位置する社会的相互関係を見出し、私たちの社会的連帯の場として、より建築的たらしめようとする」^[26]。そして、「以上私たちが今までに取組んできた建築はそのいずれもがピロティによって形づけられる空間を社会的利用に提供してきた」とあるように、ピロティはこの「社会的空間」の一例として位置づけられている。ここで注目したいのはその理論の妥当性ではなく、「空間」という語によって建築とその周囲が関係づけられていることである。ここには建築と都市を「空間」という一つのカテゴリーのもとに統一的に把握しようという姿勢が見られる。逆にいえば、「空間」という概念を導入することによって建築と都市を一体的にとらえることができるようになったということである。倉敷市庁舎(1960年)竣工時に丹下健三が記した次の文章にはそのような思考が展開されているのを見ることができる。

「もっともこのスケールが、十分にヒューマン・スケールの末端にまでは達していないことも認めなければならないが、これらのスケールの sequence 序列づけによって、広場―市庁舎―内部空間にいたる空間のオーガニゼーションを、さらに市庁舎―広場―民家にいたる都市空間の hierarchy を考えてみたかったのである。」

丹下健三「建築・都市について」(『新建築』1960年9月号, p.58)

ティームXの影響を受けたものと思われるが、「空間」という概念で建築・都市を階層的にとらえようとしているのが注目される。

1950年代の日本の建築界に「伝統論争」があったことはよく知られている。丹下らはそこでも「空間」で日本の建築的伝統を理解しようとしている。当時、池辺陽は「丹下健三氏は日本の伝統を空間の無限定性という定義をしている。日本の建築の開放性、自由性などについては今までもしばしばいわれてきたことであるが、丹下氏はそれを無限定性という語によって見事にとらえた」^[27]と記している。丹下自身は日本の建築的伝統に対して次のように述べている。

「私が伝統に対してとっている考えは、伝統の中の表現については否定するが、形とか空間という方法的に積み上げられて来たものは蓄積し得るもの、継承し得るものとする。例えば柱と梁から構成される空間にはいろいろな表現がある。素朴な表現もあれば「わび」たものもあり、「いき」なものもある。しかし空間取扱の方法に基本的な違いはなく、形は同じなのです。」

「現代建築の探究」(『建築雑誌』1956年11月号, p.14)

丹下は以下のように、「もののあわれ」や「わび」、「さび」などを素朴に継承することには疑問を呈している。

「木造の柱―梁と畳によって構成される空間には「もののあわれ」から「さび」にいたる創造の姿勢と、そこから生れる

表現をまとめているものがある。この日本建築の空間の開放性やそれにまわりついている、はかない、移ろいやすい、か弱い表現の中には、消極的な自然観があることもすでに指摘したとおりである。畳をとって見ても、そこには“わび”“さび”や“風流”の表現がまわりついているのである。」

丹下健三「現代建築の創造と日本建築の伝統」(『新建築』1956年6月号, p. 36)

丹下はそれを単純に認めるのではなく、「前向きの姿勢に立った健康な生活の知恵が、ながい歴史の過程のなかで創造し獲得してきたところの方法的成果ももっている」(同上, p. 36) ことを重視し、それを継承することを提唱している。その具体的なコンセプトとして上げられているのは「空間の典型化」である。先述のように、これは丹下を中心とするグループにとっての当時の最重要課題の一つであり、それを伝統の理解・継承にも展開したにすぎないとも受けとれるが、伝統をも「空間」という概念で理解しようとした点は注目される。

以上のように、丹下健三を中心とするグループは1950年頃に「空間」という概念を建物単体だけではなく、建築と都市の関係や日本の建築的伝統を理解する際にも展開して、自らの建築理論をつくりあげていた。ここでは「空間」という抽象的・普遍的な枠組が一貫して活用されている。いいかえれば、丹下グループは建築や都市の本質を「空間」に見ているわけである。『建築雑誌』・『新建築』・『国際建築』を見るかぎり、彼らほどこの概念を多様に駆使したものは見当たらない。彼らが日本でこの概念を活用した最初のグループの一つであったことはまずまちがいなからう²⁸⁾。『建築雑誌』1960年12月号には同年10月22日に行われた日本建築学会研究協議会「作品を通しての建築論」(pp. 691-693)の丹下健三と谷口吉郎の講演要旨が掲載されている。その中で丹下は彼の建築論をすべて「空間」を使って説明している。同じ時に講演した谷口吉郎の講演趣旨に一言も「空間」が登場しない²⁹⁾のと対照的である。

丹下グループのこのような活動によって日本の近代建築は新たな段階に達したと考えられる。すなわち、それは「空間」という抽象的・普遍的概念で建築や都市を語るやり方やその概念を設計の主要テーマにすえるやり方がこの頃広まりはじめたことを示しており、それはまた日本の建築界への近代合理主義的思考法の浸透過程の一断面を示していると考えられるのである。

5. 結 論

本研究は「空間」という概念で建築を語るやり方が日本の建築界に導入された経緯やそこに見られる特徴を分析することを通して、日本の建築界における近代合理主義、およびそれを理論的基盤とする近代(主義)建築の導入や理解のされ方の一端をさぐろうとしたものである。日本近代の建築界における代表的な雑誌である『建

築雑誌』・『建築世界』・『国際建築』・『新建築』の1887年から1960年までの記事を主な対象に、その記事に登場する「空間」やそれに類する語を含む記述を収集・分析し、下記のことを明らかにした。

明治時代・大正時代においては「空間」あるいはそれに類する語はまれにしか登場しない。その中で「空間」は「物と物との間」、「すきま」、「あるまとまりを持ったひろがり」という意味で使われていることが多い。その他には「空間芸術」とか「空間感情」のように、ドイツ美学・美術史の影響を受けていると思われる使われ方が散見される。

昭和初期においては登場頻度が高くなるものの、上記のような傾向は同様に見られる。欧米の著作の翻訳や欧米の建築家に言及するときに「空間」という語が用いられていることが多いのが特徴といえる。このことは「空間」が外来のもので、欧米の建築や建築家を語ることを通して、またドイツ美学・美術史の影響を受けながら、しだいに日本の建築界に浸透していったことを示唆するものと考えられる。

昭和初期にはわずかではあるが、「空間」を建築を語る際の主要概念にしようとしたものを見いだすことができる。その先駆者として元良 勲・山田 守・川喜田煉七郎・西山卯三らを上げることができる。特に西山が1940年頃にある行為とそれが行われる場との対応を示すためにこの語を用いたのは注目される。このやり方は戦後に他の研究者によっても展開された。この西山の貢献が示すように、「空間」を主要概念に建築を分析するやり方は、今回対象にした雑誌記事から見る限り、住宅の機能分析に最初に導入されたと考えられる。しかし、このやり方を導入した建築家の一人である川喜田煉七郎がこのようなやり方を他の建築種には展開していないことが示唆するように、「空間」はこの時期にはまだ「借り物」のレベルにとどまることが多かったと見られる。

1940年代前半には井上充夫や浜口隆一によって、日本の建築的伝統を理解するのに「空間」という概念が用いられた。

戦後、特に1950年代から「空間」という語は建築文献に頻繁に登場するようになった。その中には戦前と同様、「物と物との間」、「すきま」、「あるまとまりを持った広がり」という意味で使われただけのものが多い。欧米の文献の翻訳にもしばしば登場するが、戦後においてはアメリカの建築雑誌の記事を翻訳したものが多い。

1950年代に「空間」という語を最も多用しただけではなく「空間」という概念を最も巧みに活用したのは丹下健三と彼を中心とするグループ(丹下研究室)だったと考えられる。彼らは建築論・都市論を展開する際にも、日本の建築的伝統を理解する際にもこの概念を活用した。彼らは建築や都市、伝統をすべて「空間」という抽

象的・普遍的な概念で理解しようとしたのである。その基調をなす考え方は「空間における限定性と無限定性」や「空間の典型化」であった。彼らの活動を通して「空間」という抽象的・普遍的な概念で建築や都市を語るやり方やその概念を設計の主要テーマにするやり方がこの頃日本の建築界に広まりはじめたと考えられる。そしてそこには日本の建築界への近代合理主義的思考法の浸透過程の一断面を見ることができる。

註

- 1) 『新建築』は日本建築学会図書館・新建築社・京都大学建築学教室図書室所蔵、藤岡私蔵のものをを用いたが、下記の号は発見できず、今回の調査には含まれなかった。第1巻第12号、第2巻5号、第3巻第4号、第4巻第6号・7号・12号、第5巻2号・4号・7号・8号・11号・12号、第6巻2号・4号～12号、第20巻第11号
- 2) 『建築世界』における「空間」の初出は1909（明治42）年5月号掲載の三戸観仏房「建築家としての職分（其二）」で、そこには以下のように「空間」が用いられている。
「建築には自から二方面がある、空間的にいへば実用的と鑑賞的との二つである、」（p.29）
- 3) 伊東忠太：日本建築術に於ける曲線の性質を論ず（承前），（『建築雑誌』p.348，1894年12月号）
- 4) 大江新太郎：満州に於ける建築装飾に就て，（『建築雑誌』p.14，1908年10月号）
- 5) 「独逸建築略史（四）」（『建築世界』1920年1月号）に下記のように「空間感情」、「空間観念」という語が用いられている。
  - ・「尤も最初の間は古代の遺蹟に渠れら独特の空間感情を加味するに過ぎなかったが、中世紀になっては完全自覚した運動を興すやうになった。」（p.42）
  - ・「然して此等の時代に於ける空間観念の発展と技術の進歩とは大体三段階をなして行はれてゐる。」（p.42）
- 6) KEN TKD：安井邸を訪ふ日の記，（『新建築』p.282，1931年8月号）
- 7) 岸田日出刀が1928年6月から9月にかけて『建築雑誌』に連載した「欧州近代建築史論」は252ページにわたってヨーロッパ近世の建築史について説明したものだが、その中で「空間」という語は全部で5回しか登場しない。その中の4回は「形の峻厳，比例の純粋性と確固性，広闊なる空間，此の如きは精神的にも又實際的にも，最もよく当時の新教（PROTESTANTISMUS）の福音教義に合致適応したものであった」（『建築雑誌』p.11，1928年7月号）のように、ドイツ・バロックに関するもので、その1つは明らかにドイツ文献の引用である。最後の1回はフランス・バロックに関するものだが、そこでは「第一及び第二の天井の間に相当の空間があり」（同前，p.53）と、「物と物の間」を意味するにすぎない。この論稿の最後には参考文献が上げられており、その中には“Die Architektur der Barock und Rokokozeit in Deutschland und der Schweiz”などのドイツ語文献がある。したがって、この岸田の論稿のドイツ・バロックの項に集中して「空間」が現れるのはこのようなドイツ語の文献に頼ったせいではないか、すなわち、「空間」がドイツ美学・美術史の影響を受けて日本の建築界に浸透していたことを

うかがわせる。

- 8) 「住居の基本空間に対する一考察」（『建築と社会』1941年4月号），「極小住宅に於ける平面基準の問題（同前，1941年10月号），「住居空間の用途構成に於ける食寝分離論」（日本建築学会論文集，1942年4月）など。なお，「住居の基本空間に対する一考察」（前出）では，「就寝空間」ではなく，「寝室空間」という語が使われている。
- 9) 川喜田はアレキサンダー・クラインの住宅分析方法を日本に紹介している。それは『国際建築』1930年4月号・5月号の「アレキサンダー・クライン氏の小住宅平面の研究」，同誌同年12月号の「アレキサンダー・クラインの住宅平面の考察に就いて」などである。その中で「空間」という語が用いられているのを見ることができる。
- 10) 『新建築』p.271，1944年10月号
- 11) たとえば，「どんな建物が美しいか」（『新建築』1948年9月号，ジョセフ・ハドナットの講演を翻訳したもの），「ブルース・ガッフ（Bruce Goff）—合衆国中西部の建築家—」（『新建築』1948年10月号，“Architectural Forum”1948年3月号の記事の翻訳）など
- 12) 設計：LVグループ「あすか保育園」（『新建築』p.31，1954年8月号）
- 13) 「日本建築学生会議 コミュニティーセンターの設計競技」（『国際建築』p.54，1957年11月号）
- 14) 設計：海老原建築設計事務所「大日本インキ製造株式会社 東京工場拡張計画」（『国際建築』p.46，1954年5月号）
- 15) 設計：広瀬鎌二建築技術研究所「事務所+商店」（『新建築』p.519，1952年11月号）
- 16) 池辺 陽：図式による住宅組織の分析，（『新建築』p.47，1953年1月号）
- 17) 清家 清：住宅平面の傾向，（『建築雑誌』p.13，1953年4月号）
- 18) 同上，p.14
- 19) 「丹下健三と彼を中心とするグループ」というのは，丹下健三のほかは，「丹下研究室」・「東京大学丹下研究室」・「丹下研究室グループ」・「丹下健三計画研究室」の名のもとに登場する人物や，丹下健三設計の作品の設計主旨などを書いている人物，丹下健三とたびたび連名で登場する人物であり，その氏名は下記のとおりである。
丹下健三，浅田 孝，磯崎 新，大谷幸夫，沖 種郎，神谷宏治，黒川紀章，小槻貫一，杉 重彦，田良島昭，長島正充，馬渡俊郎，光吉健次，茂木計一郎，吉川 健（丹下以外は50音順）
- 20) 丹下健三：建築・都市について，（『新建築』p.55，1960年9月号）
- 21) 丹下健三：現代建築の創造と日本建築の伝統，（『新建築』p.29，1956年6月号）
- 22) ちなみに，『国際建築』1954年9月号のカルロ・アイモニーノ「生活をあたらしく理解する 現代建築と国民的伝統：1954年国際建築学生会議の基調報告」に「自動性に対する理想の，没趣味な繰返しに対するファンタジーの，無限定性に対する限定空間の勝利であります」と，「空間の限定性と無限定性」とよく似た表現が見られる。
- 23) 「創作論定着への試み 丹下研究室報告 1956.6」（『新建築』p.80，1956年6月号）
- 24) 同上

- 25) 丹下健三：図書印刷原町工場の受賞にさいして、(『建築雑誌』p.14, 1955年7月号)
- 26) 大谷幸夫ほか：ピロティー社会的空間一、(『新建築』p.61, 1955年1月号)
- 27) 池辺 陽：和風建築と現代のデザイン、(『新建築』p.69, 1955年6月号)
- 28) 1955(昭和30)年の前後3年間の『建築雑誌』・『新建築』・『国際建築』で「空間」という語が登場する記事の数はあわせてそれぞれ、1952年139件、1953年140件、1954年109件、1955年190件、1956年202件、1957年158件、1958年175件で、そのうち丹下健三と彼を中心とするグループによるものはそれぞれ3件、5件、7件、14件、8件、10件、10件と、数でいえば決して多いわけではない。

注目されるのはその適用の仕方であり、今回対象にした雑誌では、彼らほどこの概念を巧みに駆使した建築家を見出すことはできなかった。

- 29) 谷口吉郎は『建築雑誌』1938年1月号の「建築意匠学・序説」で「建築を単に構築と解さず、芸術と見んとするこの立場によれば、建築の本質は空間形成にありとなし、建築の物質性はこれによって美化され、斯くすることによって、初めて建築は芸術としての特性を獲得するものと考えられてゐる」(p.16)のように、戦前から「空間」という語を用いていたが、その後それを自らの意匠論や建築論に積極的にとり込むことはしなかった。

(1992年7月10日原稿受理、1993年2月2日採用決定)